

潮流

「はしか(麻疹)は命定め」と言われ、はしかを生き延びるかどうかで、その子の命が定まってしまうと言われるほどの

大病で、痘瘡(もがさ、天然痘)と区別して、赤痘瘡(あかもがさ、赤斑瘡)とも言われていたようです。ある地方では、はしかに罹(かか)ったのを確認してから戸籍に入れるというほど、死亡率の高い病気で、英語では「miserable」(不幸な)に語源をもち、現在でも百人十人に一人の子どもが亡くなっています。

ある小児科医は、はしかが流行した時に亡くなった子どもさんのお父さんが「何で、はしかで死ぬんだ!」と何度も言っていたことが、脳裏に焼きついている言っています。はしかの怖さを知っている小児科医は、はしかに罹った方が良いとは決して思いません。今やはしかは予防接種(ワクチン)で防ぐことができる病気(VPD)です。はしかに罹って、たまたま命を落とさずにすんだからといって、はしかに罹った方が自然に免疫がついて良いと考えるのは無責任で危険な考えではないかと思えます。

沖縄県では平成十一年の流行は九人の命が失われ、助かってからも肺炎や重症肺炎で医療費が月百万円を超えたり、数年して亜急性硬化性全脳炎(SSPE)という、けいれんと知能障害を起こして死に至る病気になった子どもがあります。はしかはまさしく「miserable」な病気で、自然罹患(りかん)して高熱や発疹などを乗り切った後も十年くらいはSPEの発症を心配しなければなりません。

ところが、最近ではそのような危機感が少なく、予防接種の接種率が低いところが出てきています。その結果、はしかに罹ったことがなくワクチン接種もしていない人に加え、ワクチンを打ったのに、免疫がつかなかったり免疫が低下したりした人たちが増加し、高校生以上がかかる成人はしかが増えてきて、今年のお都府の大

はしかは命定め

松田 隆

NPO法人未来副理事長、鳥取県中部医師会副会長

の患者報告数は一九九九年の調査開始以来最多となり、六月二日までの約二カ月間に大学や高校など計百四十三校が休校しています。また、先日は日本の高校生が修学旅行先のカナダで発症し、同行の生徒らが帰国便への搭乗を断られたり、米国人男性が日本滞在中に感染していたことが帰国後に分かるなど、はしかの発症数を年間百人以下にしている米国は、年間数千人以上発病し、死者も毎年数人ある日本をはしか輸出国として非難しています。

日本と同じような状況にあった韓国は、二〇〇一年からワクチンの緊急輸入を行い、八十六歳児へのキャッチ・アップ・ワクチンキャンペーンや入学前のワクチン二回接種の義務化などで、はしか排除を実現しています。日本でも、一九六一年に大流行したポリオ(急性灰白髄炎、小児まひ)の制圧に、八頭町出身の古井喜実厚生大臣は自民党内の反対を抑え、ソ連からポリオワクチンを緊急輸入



2007.7.9

し、ポリオの制圧に成功しています。国もようやく、若者へのワクチンの追加接種も視野に入れたはしか対策強化の検討を始めるように、古井氏のような英断を期待したいものです。

子どもの命を守ることは小児科医に限らず、すべての大人の役割であり、ワクチンで救える病気があるのであれば、積極的に接種するのは親の義務ではないかと思えます。確かに、ワクチン接種で副反応がないわけではありませんが、病気に罹って命を落としたり、重症になって入院して多額の医療費を使うことを考えると、医療費抑制の時代にあって、予防接種しないことのデメリットの方が大きいのではないかと思います。ワクチンで防げる病気で苦しんだり、死亡したりするほどでもないことではありません。「一歳になったらはしか・風しん混合ワクチンを! 入学前にもう一度接種!」ではしか撲滅推進ができればと思います。(倉吉市)